

DEBUT 首長

神奈川県平塚市長 落合 克宏氏

市長給与の5割を防災費に「絆」で街・地場産業を活性化

神奈川県平塚市 神奈川のほぼ中央に位置し、江戸時代は宿場町として栄えた。戦後は自動車、化学関連企業中心の商工業都市として発展。人口26万人。

——公約の防災対策の強化を相次ぎ具体化しているが

平塚市は海に面しているが、これまで津波対策が十分ではなく、災害での「共助」の意識も薄れていると感じていた。「遠くより高いところに逃げて」と、6月補正予算でJR東海道線より南（海側）の市立小中学校の屋上にフェンスを設置した。1次避難所となる民間の「津波避難ビル」も第1号の協定を結んだ。防災行政無線の機能を補うために、放送を電話で確認できるテレホンガイドやツイッターも始めた。

9月議会で市長給与を10月から2013年3月まで5割削減する条例を可決した。削減総額1370万円は防災対策に充てたい。早速、9月補正予算で防災ラジオ520台を市民に配る。被災地支援でも宮城県石巻市などに延べ66人の職員を派遣し

た。

今後、地域防災計画を国、神奈川県との整合性を取りながら見直していく。津波が来た場合の浸水想定をCGで映像化した「津波浸水モデルシミュレーション」、防災マップも作製中だ。

——「元気の出る街づくり」「閉塞感の打破」を掲げている

震災でいったん中止を決めた7月の「湘南ひらつか七夕まつり」を、規模を縮小して開催した。電力不足、警備の問題などがあったが、市民の後押しでやらせてもらい、街に元気が出たと思う。被災地の石巻市や岩手県花巻市の小学生の願いをしたためた短冊も飾ってもらった。

平塚はかつて商業都市として栄え、商圈も広がったが、時代の流れに合わずに衰退していった。キーワードは「絆」だ。農業や漁業、商工業、観光が連携すれば、活力ある街がつかれると確信している。行政は各産業、企業をつなぎ合わせる役割をしていく。将来はシンクタンクのような機構をつくれたら、と



おちあい・かつひろ 1957年平塚市生まれ。81年明治大卒、平塚市に採用。2003年から市議を2期務め、07年に市議会議長。11年4月に初当選。趣味はバスケットボール、野球、読書。54歳。

思っている。

——行財政改革の取り組みは

市役所新庁舎、市民病院の新棟、一般廃棄物焼却施設の整備という3つの大規模事業を進めていて、総事業費は300億円を超える。市の実質公債費比率は低いが、今後、借金が増えていくのは確かだ。公的施設も多く、行政が全部抱えるのではなく、民間にも担っていただくことを考えなければならない。

サッカーJ2の湘南ベルマーレのホームスタジアムになっている平塚競技場で、ネーミングライツ（命名権）のスポンサーを募集している。遊休市有地の売却も進めていきたい。

平塚市には、地域ごとに住民が身の回りのことを助け合う「町内福祉村」という仕組みがあり、公民館も充実している。各地域が色々な資源を持っている。「地域内分権」を進めて、地域の魅力を高めていけば、行革にもつながると思う。

（聞き手は地方部 杉野 耕一）